
喫茶店

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶店

【Nコード】

N1044B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

敗戦を受け自決しようとする陸軍軍人北条源五郎。彼は妻子にそれを止められ生きることにする。その彼の新たな人生とは。終戦直後のお話です。こうした人は本当にいたかも知れません。

第一章

喫茶店

その時代には何もなかった。本当に何もなかった。

いや、なかったというのは不都合かも知れない。なくしたと言った方が正解かも知れない。

長く続いた戦争が終わった。気が付けば日本中が焼け野原になっていた。

第二次世界大戦、いやそれより前から、それこそ満州事変より前からの長い戦争が終わった。そして日本に残っていたものはその焼け野原と夢も希望もなくした日本人達ばかりであった。

その何もかもをなくした廃墟の中で人々は生きようとしていた。だがその中には生きようとしないう者達もいた。

「止めてくれるな」

彼もまたその中の一人であった。北条源五郎、日本陸軍の将校であった男だ。階級は少佐である。

陸軍士官学校を卒業し、陸軍大学にまで進んだ陸軍の有望な人材の一人であった。生真面目な堅物として知られ、東南アジアの戦線においては敵からは怖れられ、味方からは頼りにされた。そんな人物であった。

だが現地の者達にも部下にも公平であり、規律正しかった。融通が利かず、厳しく、そして鉄拳制裁も辞さないといったよくも悪くも日本陸軍らしい軍人でありその拳は現地の者達には強烈な印象を与えた。

「日本の兵隊さんは何ておっかないんだ」

彼等は北条を見て敵よりも恐れた。しかし彼は彼等を侮蔑したり、差別したりといったかつての植民地の宗主国の者達の様なことはしなかった。彼等をあくまで同じ人間として見ていたのだ。

だから最後には彼は現地の者達にも慕われる存在となった。しか

し転属により内地に戻った。再開を期して別れたが結局その時が来ないままに戦争は終わった。彼にとってはこの上ない恥辱であった。「最早皇国は敗れたのだ」

彼はこの時自宅にいた。妻子と一緒にいる自宅である。

「それでどうして生き恥を晒しておられるのか」

妻の千賀子の制止を振り切って自害しようとしていたのだ。

「ですがあなた」

モンペ姿の品のある女性であった。歳は北条よりも数歳程下であろうか。如何にも軍人といった感じで口髭を揃え、厳しい顔立ちの北条とは正反対に穏やかで、それでいて美しい顔をしていた。

「まだ文子も小さいですし」

「気持ちはわかる」

二人は暗い部屋の中で話をしていた。北条の手には刀がある。それで腹を切ろうというのだ。

「しかし」

「御国が負けたから。殉されるといいますね」

「それ以外に何がある」

彼は妻に問うた。

「我が国は敗れたのだ」

声が泣いていた。彼にとってはこの上なく悲しいことであった。

「八紘一宇も何もかも。最早果たせなくなったのだ」

日本の掲げた理想が潰えた。それがどうして耐えられようか、そう言っているのである。

「それでも」

「文子の為か？」

「それもあります」

千賀子はそれを否定しなかった。

「それに」

「それに。何だ？」

最後に妻の言葉を聞いてみる気になった。彼女に顔を向けた。

「一度敗れても。御身さえあれば」

「また。戦えるというのだな」

「はい」

妻はそう答えたうえでこくりと頷いた。

「ですから。今は」

「生き恥を晒せというのだな、わしに」

「そう取られるのなら構いませんが」

千賀子の言葉は何時になく沈痛なものであった。

「ここは。文子の為にも」

「……それも天命か」

北条は観念したように呟いた。

「生き恥を晒すのも。だがきつと汚名を晴らす時が来るな」

「はい」

妻は言った。

「その時を。お待ち下さい」

「わかった」

彼は遂に刃を収めた。

「では今は。思い止まろう」

「有り難うございます」

「しかしだ」

だがそれで話は終わりではなかった。彼は妻に対して言った。

「おそらく軍は解体される」

「はい」

これはもうわかっていた。少佐という階級にある彼にはそれなりの情報が耳に入ってきていたのだ。

「わしは今後公の職にはつけんだろう。ではどうするのだ？」

「それでしたら私に考えがあります」

「何だ？」

「喫茶店です」

彼女は言った。

「喫茶店か」

「それでどうでしょうか」

「千賀子」

彼はあらためて妻の名を呼んだ。

「御前の好きにするがいい」

「宜しいのですか？」

「宜しいも何も今わしの命は御前に預けたも同然だ。ならばそれに従うのが道理だ」

彼は腕を組んでこう述べた。今切腹を思い止まらされたのだからそれに従うことにしたのである。彼もまたその覚悟はしていたのだ。「ならば。御前がすることに反対はせぬ」

「はい」

千賀子はそれを受けて恭しく頭を垂れた。

「しかしだ」

だがここで一言付け加えた。

「わしのことはいいが文子を悲しませることだけはするなよ」

「わかりました」

こうして千賀子は喫茶店を開くことになった。喫茶店といっても店はなく、闇市に大きな木箱を置き、その上に所々がへこんだやかに水を入れ、田舎や進駐軍の裏手を回って何とか調達してきた蜜柑とコーヒ―、そして精々金平糖を置いていただけのものであった。あまりにも粗末な喫茶店であった。

「これで上手くいくのかな」

北条は開店した時せっせと用意する千賀子と文子を見て心の中で呟いた。彼も喫茶店のことは知っている。戦争になるまで帝都にあった多くの店とは比べるのもおこがましい、あまりにも粗末な店であった。

だがそれでも千賀子と文子は真面目に動いていた。自分よりも妻によく似た可愛い娘もまた元気に働いているのであった。

第二章

「金平糖はそこに置いてね」

「はい、お母様」

北条は娘に自分と妻をお父様、お母様と呼ばせていた。軍人の娘として折り目正しい躰をしてきたつもりである。

だがもう今は彼は彼軍人ではない。軍もなくなろうとしているし自身もこうして喫茶店の親父になっている。思えば実に流転の生き様であつた。

「それで紙をここに貼つて」

弱い糊で木箱にコーヒーや蜜柑水の値段を貼る。お世辞にも高くない。

「これでいいわね」

「もう終わりなのか」

北条は店の用意が終つたと聞いて妻に問うた。

「ええ、そうですよ」

千賀子はそれに応えて明るい声を彼に返してきた。

「これで全部整いましたよ」

「もうなのか」

「だつて。あまり何もありませんから」

妻は少し残念そうな声でそう述べた。

「これだけ揃えるのだつて一苦労だつたでしょう？」

「まあな」

集めたのは夫である彼である。コーヒーなどは進駐軍のゴミ箱からくすねてきたものだ。この時進駐軍の残飯は人気があつた。残飯シチューというものも売られていた。中には煙草の吸殻等もあり食べるのはかなりの賭けであつたが何もない時代食べられるだけでもましたのだ。

「金平糖もな」

「全然甘くないでしょうけれど」

「けれど蜜柑があるよ」

二人の横で文子が言った。

「これで蜜柑水を作って売るんだよね」

「ええ、そうよ」

千賀子は娘にそう答えた。

「その時は貴女も手伝ってね」

「うん」

「そしてあなたも」

「わしもか」

妻に話を振られて戸惑った顔をする。

「だって今のあなたはこれお店のマスターですよ」

「そうだったのか」

てつきり妻が全部仕切っているとばかり思っていた。彼にとって

は寝耳に水の言葉であつた。

「ですから。お願いしますね」

「料理も何も出来んぞ」

「そこはまた慣れですよ」

「うつむ」

妻の言葉に腕を組み難しい顔をする。実際士官学校に入る前の子供時代、中学時代からそうしたこととはしたことがなかった。出されたものを黙々と食べるだけであつた。男子厨房に入らずと言われた時代である。彼もまた包丁一つ握ったことはないのだ。

「あなたはコーヒーをお願いしますね」

「コーヒーをか」

「はい。豆を煎じてお湯を入れて」

「それでいいのだな」

「細かいことは私が教えますから」

「わかった。では頼む」

こうして彼は生まれてはじめてコーヒーを入れ、それを人に振舞

うこととなつたのであつた。妻に側で教えられながら何とか入れた
コーヒーを客に差し出す。ドン、とした動作であつた。

「飲むがいい」

「違いますよ、あなた」

すぐに妻が注意してきた。

「入れ方が悪いのか？」

「出し方ですよ」

「出し方とな」

言われても何のことかわからない。難しい顔になつた。

「お客様へのコーヒーの出し方ですよ」

「そんなものがあるのか」

「そうですね。御存知なかつたんですか？」

「どうぞとかそういうものか」

「そうですね。こうやるんですよ」

文子から蜜柑水を受け取つた。そしてそれを客の一人にそつと出
す。

「どうぞ」

出しながらにこりと笑う。気品のあるとてもいい笑顔であつた。

「笑いながらどうぞ、だな」

「はい」

千賀子は答えた。

「おわかりになりました？」

「わかつた。それでは」

「おっさん、コーヒー一杯」

「うむ」

「だから違いますって」

そこはうむ、ではなかつた。はい、か毎度、であつた。だが生粋
の軍人である彼には中々わからないことであつたのだ。喫茶店のマ
スターになるにはかなりの苦勞が必要であつた。彼以上にその側に
いる千賀子の苦勞がである。

それから一年が経った。店はそれなりに売り上げがよく品々もよくなっていた。コーヒーも進駐軍の絞りカスから何とか普通の豆になろうとしていた。北条のマスターぶりもかなりよくなり、かなり慣れてはきていた。

蓄えもできていた。だが北条の心は晴れることが少なかった。

第三章

「ふざけおって」

彼はよく新聞を見ては顔を顰めていた。

「何が革命だ、何が赤旗だ」

新聞だけでなく雑誌を見ても言うことが多くなった。

「我々は日本にそんなものを持ち込ませる為に戦ったのではない」
そしていつもこう言った。

「それから守る為に戦ってきたのだ。ア力がどんな連中かわかっているのか」

彼は満州のことを知っていた。その前のソ連の恐ろしさも知っていた。軍にいたからこそそれがよくわかっていた。だからこそ怒っていたのだ。

「そして」

別の記事を見て怒る。

「勝った者達は。こんなことをしなかったのか。我等だけを一方的に裁くつもりなのか」

裁判がはじまるうとしていた。所謂戦争指導者達が逮捕され裁判にかけられていた。その中には北条が個人的に尊敬する者までいた。だから彼は余計腹が立ったのだ。

「あの方は犯罪者などではない」

彼は言った。

「あの方がその様なことをされる筈がない。これはでっち上げの裁判だ」

「そんなこと誰もわかっていますよ」

だがそれに対する千賀子の言葉は非常に冷たい響きがあった。

「誰も」

「.....」

北条は妻の言葉を受けて沈黙する。そのまま俯いてしまった。

「けれど。今何か出来ますか？」

「いや」

北条は妻の言葉に無念さを露わにして首を横に振る。

「今のわしには。そして日本には」

何も出来なかった。もうそれを可能な力はなくなっていた。それは彼自身が最もよくわかっていた。

「そうです。ですから今は」

「耐えるしかないのだな」

彼は沈痛な声で妻に問うた。

「そうです。今は」

「………無念だ」

呟くその言葉は泣いていた。

「我等が至らないばかりに日本をこの様な目に遭わせてしまった。御前達にも」

「構いませんよ」

しかし千賀子は夫に対してこう言った。

「何故だ？」

「こうしたこともありますから」

「あるのか」

「はい。あなたにあの時言いましたよね」

そして夫が切腹しようとしてそれを止めた時のことを話した。

「今はお耐え下さいと」

「ああ」

妻に言われて彼もそれを思い出していた。

「そうだったな」

「はい、そしてそれは私もです」

「御前もか」

「あなたの妻ですよ」

こう応えて笑った。にこりとした、優しい笑みであった。
「一緒ですよ。何処までも」

「一緒か」

「はい、今は耐えましょう」

そして言った。優しいが芯のある強い声だった。

「また。時が来ます」

「果たして来るのか」

どうしても悲観的になる。今の状況で未来を明るく考えることは困難であつた。何もかもがなくなった時代だ。それでどうして未来を考えられようか。だが妻は今それを見据えていたのだ。北条はこれに感嘆を覚えていた。

「来ます」

だが妻はまた強い言葉を北条に向けた。

「絶対に」

「来るのか」

「はい。ですからそれまでは」

「自重せよと言いたいのだな」

「左様です。それが何時かはわかりませんが」

「若しかすると。わしの生きているうちではないのかもな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それには千賀子も答えられなかった。黙ってしまった。だがその顔は決して俯いてはなかった。

「千賀子」

彼は妻の名を呼んだ。

「はい」

そして彼女もそれに応えた。

「その日が来るのなら。わしは待とう」

「待つて頂けるのですか」

「そうだ。それまではマスターをやらせてもらう」

「有り難き御言葉」

「しかしな」

それでも彼の顔は晴れなかった。

「その日が来るのは。何時になるのか。だが男に二言はない」

彼はもう迷ってはいなかった。

「待つぞ。それまで側にいてくれ」

「有り難うございます」

「文子の代になっても。いやそれで降かも知れぬが」

どれだけの時間が経つかわからない。しかし彼はその時を待つと決めたのだ。決めたのならもう変えない、変えたくはなかった。

「わしは待つぞ」

「はい」

二人は頷き合った。そこにはもう迷いも未練もなかった。ただ覚悟だけがそこにあった。そしてその覚悟だけで充分であったのだ。

第四章

次の日も喫茶店に出る。相変わらず人々の顔は暗く、何もない。そして道もあちこちが荒野のままであつた。その風景は何時までも変わらないのかとさえ思える程であつた。

「蜜柑水いらないよ」

「ではコーヒーですか？」

文子が客の相手をしていた。その客は若い男であつた。戦地から帰つて来たらしくボロボロの軍服を身に纏つていた。階級は上等兵であつた。

「いや、蜜柑をくれよ」

「そのままですか？」

「ええ。駄目かな」

「いえ、いいですよ」

千賀子がそれに応える。にこやかに笑つていた。

「ただ、お値段はお水よりしますけど。いいですか？」

「ああ、構わないよ」

男はにこりと笑つてそれに応えた。

「ずっと蜜柑が食べたかつたんだよ、日本の蜜柑が」

彼はそう言いながら金を出す。そして文子に手渡す。

それと代わつて蜜柑を受け取つた。早速その場で皮を剥いて食べはじめた。

「美味い」

屈託のない、素直な笑顔であつた。

「美味いよなあ、この蜜柑」

「そんなにですか？」

「俺満州にいたんだよ」

「満州に」

「ああ。そつから命賭けで帰つて来て。それでやっと日本まで来て」

「そうだったんですか」

「アカの奴等に何度も殺されそうになったさ。けど何とかここまで逃げ延びてきたんだ」

「それはまた」

「やはりな」

北条はその話を聞いて顔を顰めさせた。ソ連軍のことはよくわかっていた。だからこそ顔を顰めさせたのだ。

「その間碌なモン食ってなかったんだ。蜜柑みたいに甘いのかな全然食べられなかったんだよ」

「その蜜柑、美味しいですか？」

「ああ」

屈託のない笑みのまま言う。汚れただけの顔だがその笑みだけで白く見えた。歯も何か汚れていたがそれでも真っ白に見えた。不思議な笑みだった。

「元氣が出て来たよ」

「まあ、大袈裟な」

「いや、大袈裟じゃないさ」

彼は笑みをそのままに述べた。

「やっぱりさ、美味しいもの食べると違うよ」

「むっ」

北条はその言葉を聞いて思うものを見出した。

「やろうって氣が出て来るんだ」

「そうですか」

「ああ、何かね。今はこうして何もないけれど」

男は辺りを見回しながら言った。

「すぐに何とかしてやろうってね。そう思うよ」

「励みになったみたいですね」

「ああ」

また屈託のない笑顔になっていた。

「有り難うな、この蜜柑」

「いえいえ」

「また寄らせてもらつよ。その時またな」
「はい」

男は立ち去った。また別の客が来た。北条はさっきの男が立ち去るのを眺めながら千賀子に対して言った。

「美味しいものを口にするとやる気になるのだな」
「それはそうですよ」

千賀子の言葉は何を今更、といったものであった。

「今は食べられるだけでも有り難いですし」
「うむ」

「その中で美味しいものを食べられると。やっぱり元気が出ますよ」
「それはわしが入れるコーヒーもだな」
「はい」

夫のその言葉にこくりと頷く。

「そうか」
「ですから。頑張つて下さいね」

「わしが美味しいコーヒーを入れればそれだけ人が元気になるのか」
彼は今それがわかつてきていた。

「わしのコーヒーで」
「そうですね。そして頑張ってください」

「そして皆が頑張れば日本も」

話が繋がってきた。北条はそこに自分の進むべきものを見出そうとしていた。

「なあ」
「はい」

夫婦は顔を見合わせあった。

「二人で、いや三人で日本一の喫茶店を作るか」

「日本一のですか」

「そうでなければ世界一のだ」

彼は大きく出た。

「世界一ですか」

「わしのコーヒーで人が元気になればそれだけ日本が早くよくなる」
「そうですね」

元気になりどんな働いてくれれば。そうでなくとも明るくなれば。それだけで日本がよくなっていくのだ。少なくとも今のドン底はなくなる。

「だから。わしは入れるぞ」

「コーヒーを」

「そうだ、そして日本一のマスターになる」

「それが。あなたの新たに進まれる道なんですね」

「そうしたい」

妻の言葉に強い返事で応える。

「そして日本がよくなれば」

「長い道のりでしょうけれどね」

「まずは明るくならないとな」

「ええ」

まだ道行く人々の顔は暗い。敗戦で茫然自失となっている。それは北条も同じであった。何をしていいのかわからなかったのである。だが今それを見出した。ならば迷うことはなかった。

「やるぞ」

「はい」

二人は頷き合った。

「この店を日本一の店にしてやる」

「はい、絶対に」

まだ焼け跡が残る時代の話であった。敗戦の後の焼け跡での二人の誓いであった。

第五章

「そんなことがあったんだ」

「そうらしいわ」

可愛らしい女の子が黒を基調としたレトロな店のカウンターで若い男の相手をしていた。見れば女の子なのに洒落たタキシードのベストに蝶ネクタイ、ズボンといった格好であった。

「曾爺ちゃんの話だけだね」

「そんなに昔だったんだ」

「お婆ちゃんはいついこの前みたいな感覚で言うけれどね。もう大昔よ」

「この店ができた頃からだからね」

「うん」

女の子は客の言葉に頷いた。

「戦争が終わってから暫く。苦労したんだ」

「しかし軍人さんからマスターになるなんて珍しいわね」

「曾爺ちゃんの話だと何でも今でも軍人らしいよ」

「今でもって」

「そつ、今は隠居してるけれどね」

女の子はここできりと笑った。

「曾婆ちゃんと一緒にね」

「そつか、まだ御健在なんだ」

「コーヒーの入れ方教えてくれたんだ」

「ふうん」

「これを飲んだ人が元気になるようにって」

「確かに美味しいね、このコーヒー」

「ありがと」

それを言われてにこりと微笑む。

「そう言ってもらえると助かるわ」

「いやいや、本当に」

客は手を振ってそう言った。

「こんな美味しいコーヒーそうそうないよ」

「曾爺ちゃん今でも言うんだ」

「何て？」

「コーヒーを飲んで元気になってくれる人がいればそれだけ日本が元気になるって」

「ふうん」

「もうソ連もなくなっただけ日本はまだ完全に元気になってないって言うってね」

「何か深刻な話になってきたね」

「曾爺ちゃん軍人さんだったから」

女の子はまたそれに言及した。

「戦争に負けたことが忘れられないんだ」

「やっぱり」

「終戦直後は色々あったらしいんだ。切腹しようとしたり」

「そういうことは結構あったらしいね」

「そうらしいね」

実際に敗戦の国難に殉じ自決した多くの軍人達が存在した。中にはまだ若いこれからの青年達もいた。彼等は敗戦を悲しみ、そして国に殉じたのである。それを嘲笑うことは誰にも出来ないであろう。彼等にも彼等の考えがあり自ら命を絶ったのであるから。

「それでね。曾婆ちゃんに止められて」

「喫茶店のマスターになって」

「自分のコーヒーで少しでも多くの人を元気にするんだって頑張ったらしいよ」

「そしてこの店を建てて」

「うん。で、今あたしがここにいるのよ」

「美味しいコーヒーも飲める」

「曾爺ちゃんに言わせればまだまだらしいけれどね」

少し苦笑いを浮かべた。

「けれど。段々よくなってきたるってさ」

「よかったじゃないか」

「あたしのコーヒーも日本もね」

「日本もか」

「あたしが小さい頃は本当にお¥どなるかって心配してたそうだけ
れど」

「それが変わったんだな」

「うん。後は御前に任せたなんて言ってるよ」

「お店かい？」

「日本も。あたし達につて。曾爺ちゃんの思いを絶対に果たせてく
れって」

「どうやってやるかな」

「あたしはコーヒーでやるよ」

女の子の声は明るさを増した。

「このコーヒーでね」

「じゃあ俺も何かしてみるか」

「あんたも？」

「ああ、このコーヒー飲んでな」

「そうだね、まずは動かないと」

女の子はにこりと微笑んだ。

「日本もどうにかならないからね」

「曾爺ちゃんが好きな日本にならないからね」

「うん」

二人は頷き合い、そして女の子の入れたコーヒーが飲まれた。遠
い、敗戦から残っているコーヒーが今飲まれていた。廃墟だった国
も今では立派に繁栄している。そして。

全てはこれからだった。呪縛から解き放たれるのは。今二人はそ
れに向かって動きはじめたのであった。そして日本も。敗戦も何時
かは終わり、心は蘇るものなのだから。

喫茶店

完

2
0
0
6
・
7
・
3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044b/>

喫茶店

2010年10月8日15時04分発行